

「道徳」の源泉としてのムハンマド（四）

—何故ムハンマドは救済の手本とされるか—

保坂 俊司

目次

はじめに

ムスリムとムハンマド

聖者の中のムハンマド

イスラーム独自の預言者ムハンマド

包括規範としてのイスラーム法

キーワード…ムスリム倫理、ムハンマド、道徳規範

はじめに

イスラームにおける宗教、つまりイスラーム教徒（以下ムスリム）と日本人の一般的理解における宗教との相違について、いくつかのキーワードによって非常に簡単ではありますが、検討してきました。次に、イ

スラームにおけるいわゆる行動規範、つまり道徳について検討することになります。

但し、正面から道徳といっても、余りに抽象的でポイントを絞りきることは、筆者の力に余ることもありませんので、今回はタイトルに掲げたようにムハンマドが、ムスリムにとって日常生活から宗教生活にいたるまでどのような存在であるかについて、検討しようと考えます。

イスラームの世界では、ムハンマドは特別な存在として意識されています。イスラームあるいはムスリムの精神性から社会生活の現実面での価値観や行動原理を理解するためには、このムハンマドに対する神学的位置づけから、日常レベルまでのムハンマド観の諸相を理解することが不可欠です。特に、道徳レヴェルの問題を議論すること、つまりムスリムの日常の行動規範を理解するためにはムハンマドの日常生活に関する情報、これをイスラームではスンナ（聖伝といいます）の存在抜きには、理解不可能です。

以下では、ムハンマドに関する様々な位置づけつまり、神の使徒、あるいは預言者としてのムハンマド観に始まり、ムスリムの長、民衆に神の救済の具体的な事例を提示する者、つまりムスリムの模範とみなされるムハンマド観までを簡単に検討し、ムスリムにおけるムハンマド像を明らかにし、いわゆるイスラームの社会規範、行動規範、道徳観を明らかにしてゆきたいと思えます。

ムスリムとムハンマド

一般にイスラームでは「人間は神の意志に従って行動しなければならず、そこで、いかにして神の意志を知るかが重大な問題となるのであるが、神の意志は『コーラン』およびハディースのみしることができると

信じられている。」(牧野『ハディース』下四一三)といわれています。

そして、この神の意志を言葉で知る事の出来るのが『コーラン』ですが、『コーラン』は聖典であっても、また可なり詳しい戒律が示されているけれども、それがそのまま日常の行動原理になる、というほどには具体性にも、また規範としても不十分である、といわれています。

ところで、預言者ムハンマドは『コーラン』をのこして世を去ってしまった。しかも、自ら預言者の「打ち留め」として、その後の神の恩寵つまり、救済の細目を下される可能性を自ら封じていったのです。そのため、残された人々は、大いに当惑したといわれます。そこで、彼らが次に継ったのが、神の直接の啓示ではなく、神に選ばれた預言者の言動をそのまま真似る、学習するという行為です。

というのも、それは神に選ばれた預言者であるムハンマドは、理論的には最も神の救済に近い存在であり、理論的には彼の行動をそのまま繰り返し返せば、少なくとも神の意志に大きくはズレる事はないであろうという演繹的な考えによります。この演繹的な発想には、イスラーム以前のアラブの風習が大きく影響している、とも言われています。というのも、牧野氏によればイスラーム以前のアラブには、スンナと呼ばれる「先祖が代々行ってきた習わし」(同四一六)があり、アラブの人びとは、この「祖先伝来の部族的慣行に忠実に従うことが、何よりも重要な価値基準あるいは美德と考えられていた。」(同四一六)のです。

この習わしに従うという慣行が、祖先の習わしから「ムハンマドの行為」に移行して、「ムハンマドの行為を真似る」と「彼の行為をなぞる」というスンナ、つまりムハンマドのスンナを通じて神の救を得るという新しい宗教的な慣行が生み出されたというわけです。

この意味でムハンマドの存在は、信徒が絶対服従すべきスンナとしての唯一性、絶対性を獲得しているの

です。もちろん、ここでいう絶対性といっても其れは、神の絶対性というより他に代える事のできないという意味での絶対性ということです。

いずれにしても、預言者ムハンマドの存在は、平等主義をとなえるイスラームにおいては、例外的な存在として、その理解には以下のような構造があることを知っておく必要があります。つまりイスラームにおけるムハンマドの存在を理解するには、二つの方向から考える必要があります。それは創造主にして唯一絶対の神の側からの視点と、被造物側の視点です。まず神の側からすれば全ての人間は、神の被造物として平等である、という事になります。一方、人間の側に立てば、神は神の言葉を人々に伝える存在、つまり預言者（ナービー）として、ムハンマドを選ばれたのであるから、彼は特別な人間である、という認識が成り立つということになります。

この違いを竹下政孝氏は、イスラームにおいては「たしかに人間は皆信仰においては平等である。しかし、ちように宮廷にお仕えする人びとは皆、王の僕であることでは平等だけれども、彼らの間には掃除夫、馬丁、大事の区別があるように、神の僕の間にも相違は存在するのである。」というイスラーム法学者のフジャイリーの言葉を紹介しておられる。(竹下『イスラームの思考回路』一七七)

竹下氏が「イスラームは他の宗教と異なつて教会や聖職者をもたないということの特徴とする。すべての信者は神の前に平等であり、神と人間との仲介をする人びとというものはない。」(同一七六)といわれるように、イスラームには救済における差別はない、とされます。しかし、その一方で竹下氏が「しかし、すべての信者の平等性にもかかわらず宗教的資質はすべての信者に平等に付与されているわけではない。それゆえ本来は平等なはずのイスラームでも宗教的権威をもつ聖なる人々が発生してきた。」(同一七六)といわれ

るように、イスラームにおいても宗教的な優位性をもつ特殊な人々、所謂聖者は認められたという事です。もちろん、そのような人々は、イスラームにおいてはキリスト教や仏教のように宗教的なエリートとして制度化されることはなかったのです。つまり聖者は存在してもそれが制度化され、固定化され聖職者階級として認められる事はなかったという事です。

しかし、そうは言っても現実に聖者として崇められる人やその集団が、イスラーム内に存在することも確かです。そして、その最初の存在がイスラームの創始者ムハンマドでした。

つまり、イスラームにおいては、その開教当初から、神の前の人間の平等を説きつつ、その一方で人間における区別を幾層にも想定したのです。つまり聖者たる人間とそうでない人間という先ず大きな枠組みがあります。そして、さらにその人間においてもイスラームの信仰を受け入れた人間つまりムスリムと、非ムスリムがあります。この非ムスリムにはイスラームを知らない人間、イスラームを知ってはいるがムスリムになることを拒否するものあるいは、イスラームを一旦は、受け入れながらもこれを捨てた人間という区別があります。

例えば「まことアララーの御目より見て、畜生の中でも下の下に当たるものは、無信仰者」。〔『コーラン』八章五七節〕とか、「これ、予言者、お前は無信仰者や似非信者どもを敵としてあくまでたたかうのじゃ」。〔『コーラン』九章七三節〕など厳しいものとなっています。

その一方でムハンマドに象徴される聖者に対しては、服従と尊敬が強く要求されています。たとえば「信仰を受け容れ、家郷を棄て、己が財産も生命も擲ってアッラーの道に奮闘して来た人びと……この人たちがそ本當の信者。お赦しと結構な食物が(やがて来世で)惜しみなくいただけるであろう。」〔『コーラン』八章

七五節」というように、信仰の褒美として、救済が保障されるのです。

以下においては、イスラームにおける聖者について竹下氏の分類を参考に検討しましょう。

聖者の中のムハンマド

竹下氏によればイスラームの聖者は一、ムハンマド、二、諸預言者、三、ムハンマドの家族（アッフル・アル・バイト）、四、ムハンマドの教友、五、スーフィー聖者、六、その他の敬虔で有徳な人びと（竹下、前掲書一七七）ということになります。

本稿では、これら多種多様な聖者の検討するわけではありませんので、これらの意味を検討することはいたしません。ムスリムの行動規範に、これら全ての人びとが、深くかかわっているということは指摘しておきたいと思います。もちろん、その中で預言者と呼ばれ、また使徒（ラスール）と呼ばれる数少ない選ばれた人びとは、ムスリムの行動規範の形成、つまり倫理道德の形成に特に重要な役割を果たします。そして、その際たるものがムハンマドという事になります。

この預言者であり使徒であるムハンマドのムスリム社会における重要性を理解することは、日本人には多少の予備知識が不可欠です。先ずこの預言者あるいは使徒について、簡単に紹介しましょう。

竹下氏によれば『コーラン』では、使徒（ラスール）という言葉が三三一回出てくるそうです。それに対して預言者（ナビー）という言葉は、七五回で両者には頻度の差があるそうです。（同一七九）

このナビーもラスールもどちらもイスラームという宗教の母体であるユダヤ教を起源とするセム族の宗教

に特徴的な概念です。所謂セム族の宗教は、他の宗教と異なり人間に超絶し、人間との交流を拒否する絶対孤高、つまり唯一神にして万能神という特殊な神観念を基礎としています。

この神は、被造物である人間からの働きかけには一切応じず、ただ神が提示した指示、命令——これが『コーラン』に纏められています——と其れを受け入れて、其れに従うといふムスリムとの契約行為によつてのみつながっています。つまり、イスラームの神は、人間のささげる貢物や祭祀などで、人間の願いを受け入れてくれるというような神ではないということです。セム族の宗教における神は、人間からの働き懸けには一切応じない神なのです。その意味で超絶であり、孤高ということなのです。

しかし、一方でその神は、人間を蟲履し、人間に契約という形で救いの具体的な方法を与えるとも考えられています。これが啓示、あるいは預言ということになります。ですから、啓示にしろ、預言にしろ、神が人間のために、その慈悲心によつて特別に救いの道をお教えくださったということになり、その言葉を伝えるものは、特別の存在と看做されるわけです。彼らが所謂使徒であり、預言者なのです。そして、彼らが伝えるものは、神との契約の文言ということになります。それが文字化されたものが聖典（アル・キターブ）で、キリスト教では『聖書』であり、イスラームでは『コーラン』になります。

もちろん、この預言者の位置づけも宗教によって大きく異なります。周知のようにキリスト教では、神の預言者であるイエスは、同時に神の子であり、人びとの救世主（キリスト）といわれます。ところが、イスラームでは、キリスト教のように神の分身（位格）としてのイエスの存在を認めませんので、イエスも一人の預言者であり、その地位は六〇〇年の歳月を経て、ムハンマドに引き継がれた、と考えます。

しかもムハンマドは『コーラン』中で「預言者の打留」（三三章四〇節）とされており、『コーラン』以後、

新しい神からの救いの道は齋されない、という認識に立っています。つまり、『コーラン』は、人類にとって神からの救いの道のラストチャンスという認識です。

その最後の啓示を伝えてくれたのが、ムハンマドというわけですから如何に「汝（マホメット）より前に我らが使わした人びともみなただの人間で、それが啓示を受けただけのこと（預言者、使徒はすべてマホメットとおなじただの人）……あの人びと（使徒）とて、別に食物を食わぬ身体（肉体ならぬ神秘的なからだ）にしてやったわけではなし、また不死不滅でもなかった。」（『コーラン』二二章七節）とか、「我らは、汝（マホメット）より前のどのような人間にも不死を授けたことはない。」（『コーラン』二二章三五節）さらには「汝（マホメット）より前に我らが遣わした使徒もみんなめしを食い、市場を歩き廻っていた。」（『コーラン』二五章二節）、さらには「本当のことをご存知なのはアッラーだけ。わしはただ託されて来た（御言葉）をお前らに伝えるまでのこと。」（『コーラン』四六章二節）などと、預言者といえども普通の人間であるなどといわれても、それでムハンマドへの畏敬の念や崇敬が薄れるわけではないのです。

というのも、セム族の宗教における神の言葉の伝達者としての預言者は、「この者は、古来（神に遣わされた）警告者と同じ一人の警告者」（『コーラン』五三章五七節）さらに「（アッラーは）お前（マホメット）に真実をもつてこの聖典を下し給い、其れに先立つもの（モーセの律法、キリストの福音）の確証となし給うた。」（『コーラン』三三章二節）など、いずれにしても人間の側から見れば、みな神の前に立つもの、つまり一般信徒の模範であることに相違がないからです。

というのもアッラーの御目よりすれば、真の宗教はただ一つイスラーム（神に対する絶対無条件的服従を意味する）あるのみ。しかるに、聖典をさすけられた人びとは立派な知（神の啓示による特別な知恵）を戴

いて」（『コーラン』三章七五節）いる人びと、という位置づけは変わらないからです。

このようなムハンマドの使徒あるいは預言者としての、セムの宗教の伝統に根ざした位置づけを前提として、イスラーム道徳の規範としてのムハンマドという認識は生まれたのです。

イスラーム独自の預言者ムハンマド

以上のようにイスラームは、セム族の宗教の一員として預言者によって神の御言葉が、伝えられたという型式を踏襲します。そして、その御言葉が救済の具体的な条件であり、その条件を実行することが救済の前提であり、それは神と人との契約です。そして、この救済条件が、律法という形できわめて具体的に示されるというのも、セムの宗教の特徴です。尤も、キリスト教はセム族の宗教でありながら、独自で具体的な救済条項を持たないために、旧約に示された律法を恣意的に選択し、実行しています。

これに対して、イスラームの聖典『コーラン』には極めて細かい救済規定が示されています。しかも、その救済規定に「宗教性と倫理性とが混在している」（塩尻「イスラームの倫理」一〇七）というのも、イスラームの特徴なのです。

つまり、『コーラン』は「人間の生き方の指針を明示する。」（同一〇六）ものであり、それは「人間の日常生活を信仰生活から切り離さないのです。社会のただなかにあつて、神の指針に従って人間的な普通の生活を営むことがそのまま信仰生活なのであり、世を捨てて出家したり禁欲的な修業をすることではない。」（同一〇九）というのが、イスラームの基本認識であり、ムハンマドの教えでした。そして、先に述べたように、

そこにアラブのスナナの伝統が、イスラーム的に読み替えられたのが、現在のムスリムの行動規範の核心であるというわけです。

この『コーラン』とスナナを中心に形成されたものがイスラーム法、シャリーアということになります。従いまして、イスラームの法は、西洋流に言えば宗教法を中核に、世俗法が形成されているという事になります。

仏教で言えば、所謂戒律から民法や刑法が導き出されているという事になります。

包括規範としてのイスラーム法

このように、イスラームにおいてムハンマドが特別な存在としてあらゆる意味で重視されたために、イスラーム法は「法と道徳を不可分のものとして含んでおり、この特徴は、聖と俗を区別しないイスラームという宗教の特徴に由来する」（柳橋「比較法上のイスラーム」七七）という事になっています。

この点は、すでに見たようにムハンマドの日常行為（スナナ）が、救済規定とオーバーラップする理由です。ところで塩尻氏の分類によれば、シャリーアには「一義務の行為、二勧告あるいは推奨の行為、三許容される行為、四嫌悪される行為、五禁止される行為」の五つに分類されるのです。そしてさらにこのうち一般的な法に当たるのが一と五あるのに対して、価値規範あるいは道徳規範に当たるのが二―四です。そしてイスラーム法としてのシャリーアに含まれているがゆえに、シャリーアは「法」であると同時に「道徳」でもある、ということになります。

しかもシャリーアは、「共同体（ウンマ）の一員としての人間の社会的生活にかかわるものであるが、同時に個人的な生き方をも統御する。」（同一二）ために、一層道徳性が顕著となるのです。この点を塩尻氏は続けて「つまりシャリーアは公私にわたる人間生活のあらゆる面に包括的にかかわる『神の意志』なのである。」（同）とされ、さらに「この点に法と道徳の不可分の側面を見出せる」（同）とされているというわけです。

このようにイスラームの法と宗教生活は不可分であり、これをイスラームの包括規範とすればこのイスラームの包括規範の源泉は、端的に言えばムハンマドへの啓示にその源泉が求められ、さらにその啓示を預る者に絶対の信頼を寄せ、彼に従うこと、これこそがイスラームが、セムの宗教の典型とされる所以でもあります。だからこそ、ムハンマドは、前述のように預言者、あるいは使徒と呼ばれるのです。

そして繰り返すようですが、このセム族の宗教の伝統の上、というより伝統の典型としてイスラームの法と倫理道徳の源泉、あるいは源にムハンマドは、位置するのです。つまり、全てのイスラーム的価値の源泉である『コーラン』と、全てのムスリムの模範としてのムハンマドという認識は、そのどちらもが生身のムハンマドに集約するという点に、イスラームの特徴である一元性が見られるのです。つまりムハンマドの絶対性ということなのです。

ところが、そのムハンマドは、市場を歩き回る一介の人間として生活し、かつ自分以外の宗教的権威者の存在を認めず、つまり自らを使徒、預言者の「打ち留め」として亡くなってしまふのです。そのためにイスラームにおいては、聖職者階級は生まれずまた、そのような行為に意味を認める事、少なくとも宗教的な優位を認める制度は生まれませんでした。その意味でイスラームは、徹底した在家主義と言えます。

この点を小田淑子氏は「イスラームは徹底した在家宗教だと述べたが、社会生活をする人びとに信仰心を育み持続させる方法として、あるいは宗教的人間の教育方法として、日々の暮らしと結びついた行為は重要である。形ばかりの礼拝も、神を思い出させるきっかけになり、食物規範（豚肉等の禁止）は食事のたびに自分がムスリムであることを自覚させる一助になる。行為を伴わずに信仰心を育て維持する方が困難ではないだろうか。日本人の常識とはまったく逆だが、律法をもつイスラームは人間の心の弱さを見抜いているともいえる。」（小田二二八）とまとめられている。

このようにイスラームの日常生活は、即ち宗教生活であり、その生活の具体的な型式が、ムハンマドによって与えられた、ということです。

今回は、このムハンマドとムスリムの生活の連続性の意味をさらにイスラーム道德という側面から検討しましょう。（以下次号）

引用文献

- 小田淑子「イスラームの宗教性」竹下政孝編『イスラームの聖者』竹下前掲書
- 思考回路（講座イスラーム世界4）栄光教育文化研究所、一九九五
- 塩尻和子「イスラームの倫理」竹下前掲書
- 柳橋「比較法上のイスラーム」竹下前掲書
- 竹下政孝「序」竹下編『イスラームの思考回路』・「預言者と牧野信也訳『ナディース』（下巻）中央公論社、一九九四